

遙かなる風雪

③

実録・柴田音吉洋服店

洋服着用令の前後——背広に羽織着る人びと

慶応2年、兵庫は政府の極にあった。幕府最後のあがきである長州征代の軍費は関西の民衆を苦しめ、ついには打ちこわしの事件となって爆発した。

幕府崩壊への“世直し”の声は、兵庫から大阪へ、江戸へとひろがってゆく。

兵庫の外人居留地の近くに最初の洋服屋ができたのはこの年であったという。

隊長の兵士はチョンマゲ、洋服に刀を差していたが、これは日本に生れた最初の洋服による制服でもあった。

古来、服装は戦いによって多くの変遷をみている。種々鳥銃を持った兵士たちは、新しい武器にふさわしい、機能的なタボトのない洋服にとびつた。洋服は、そのように活動性によってまず、日本人に認識されていった。

明治元年、正式開港と同時に、貿易港として地の利を得た神戸はめざましい欧化へのスタートを切った。

初代兵庫県知事としてこの地へ乗りこんだ伊藤博文（当時使節）は、世界へ向ける玄関口としての神戸港都建設にその全力を挙げた。当時博文はすでに洋服を着用している

高貴を求めてやってきた外国人、これに接触する人びともまた、洋服を必要とした。

おびただしく渡来した明治政府招へいの外国人たちは、彼らの衣服を作る職人を養成し、一方世界へ向って留学していった階層は、フロックコ



柴田音吉洋服店内部（明治年間）

ートに身を包んで再び故国の土を踏んだ。

この開かれた港町にあった服巻、ハッチ専門の“装束屋”。やその職人たちは、次第にズボン仕立職へ、さらに洋服仕立職へ転業して行く。

それらの仕立業のなかには当然、本物の技術をもってやってきた外国人経営の店もあった。

音吉が、洋服仕立の技法を習得するため足を運んだといわれるスキップ商会も、おそらくそれらのひとつであったろう。

音吉が生産得意としたのはズボンの縫製、縫製だった。そのことから、当初創業したその店がズボン専門の店であったという伝え話は真実らしく思われる。

× ×

明治5年、官員の礼服が洋服に改められた。当時、伊藤博文の“大いなる遺産”のひとつ、福原遊都をそぞろある

きする人びとの服装はコントンとしていた。

洋服に下駄ばき、その上に羽織を着たものもある。トンビに洋傘をもってすまして行く男、折角の洋服の上に細ヒヤを巻き、刀を差した一見元ヤムライ風、和服に洋風の靴をはいた者、かと思うと赤い髪をした外人が、和服を左前に着て歩いてもいた。

街を歩く女性は、まだ和服が多かった。それでも袴をはいて、小わきに洋書をかかえる令嬢風もいたし、袴、靴で乗馬をこころみる勇敢な女性もいたことが記録に残っている。当時の名優菊五郎が長袴に洋服姿で東屋入りしてファンを驚かしたのも、このころだった。

明治5年ごろから各地方で断髪令が施行され2年ほどの間にチョンマゲ姿は消えた。

無類の新しいもの好きだった音吉は、当然自分の作った洋服を着て、いく早く髪を切り、新興の息吹に満ちた神戸の街を胸を張って歩いた。

明治7年、神戸—大阪間に鉄道が開通すると、矢もタテもたまたま乗ってみる。

鉄道の便利さは、音吉の脳裡に突きついた。より便利なものへの心は動きつつあった。便利な衣服、動きやすい衣服、しかも日本人に合った衣服への限りない夢が、音吉の胸のなかで次第にふくらんで行くのだった。（つづく）

同 和子記者

初期の
手動ミシン

